

星の王は果てへ臨む

龍覇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「一番人気を紹介しましょう。8番、ステルラレックス!!」

そのウマ娘は、白かった。

銀ではない、雪のように白いウマ娘が立っている。

白毛は走らない。世間はそう言われている。

白毛はあまりいいない。いても、GIに勝てるウマ娘はそういない。

故に、走らない、はずだった。

ステルラレックス。

ラテン語で「星」と「王」の意味がある。
誰もが言う。

皇帝がいるのだ。帝王がいるのだ。怪物がいるのだ。
彼女を表すならそう、《星の王》である。

目次

第9 R	第8 R	第7 R	第6 R	第5 R	第4 R	第3 R	第2 R	第1 R	設定
54	47	42	35	30	26	18	11	5	1

設定

ステルラレックス

病弱の妹が府中の病院に転院する都合で幼稚園の時に引越してきた。

たまたま引越し先の家の隣に住んでいる、ピワハヤヒデ、ナリタブライアンの姉妹と仲良くなり、三人でかけっこすることが多くなる。

二人からはテルと呼ばれている。他は親しくても、レックス。

レックスは、ハヤヒデ（以降ハヤヒデ）をハヤちゃん、ブライアン（同述）をブーちゃんと呼んでいる。

二人の他にも、妹のお見舞いには必ず花を買っていくので、たまに花屋の手伝いでいるナリタタイシンのことも知っている。

小さい頃は背も小さく、尚且つ珍しい白毛な為、からかわれることが多かったが、走りで黙らせていた。

別名 星の王、白毛の怪物、白星の王

容姿

白髪のパワパワのボブに、緑色のつり目。緑のリボンをかチューシャみたいにつけており、左に結ばれている。

肌も白く、ウマ耳は大きめ。左耳にシンプルな青のピアスを付けている。しっぽは細め。

見た目のベースは東方Projectのレミリア・スカーレットを、大人にしたような感じ。

スリーサイズ B 85 W 56 H 80

私服 カジュアル系、キレイ系が多い。

勝負服

薄い赤のワイシャツに青のネクタイ、まるで王様と思わせる白い毛皮付きの赤マント、黒のかぼちやパンツに、黒と金のショートブーツ。

性格

明るく、お調子者。だからといってバカではない。

姉らしく、しっかりした一面があるが、ハヤヒデが隣にいと発揮しづらいが、ブライアンがいる場合は遺憾無く発揮される。甲斐甲斐しくお世話焼きたがる。

ON/OFFの切り替えがいい意味で激しく、レース関係のものはガラツと雰囲気が変わる。

所属 高等部、栗東寮（ブライアンと同じ学年）

身長 164

体重 概ね理想的

誕生日 4月21日

得意なこと 軽業ができる

苦手なこと 繊細な作業

耳のこと 絶対音感らしい

尻尾のこと 少しでも汚れると気が立ってしまう（レースやトレーニングを除く）

靴のサイズ 左右共に24.5cm

家族のこと 妹は尾花栗毛で、ゴールドシチーに憧れている。

目標 クラシック三冠。シニアではハヤヒデとブライアンだけではなく、強者と走り、勝つこと。

ミスターシービーみたいな走りをしたい。

全部のレースで、姉らしく、かっこいい姿を妹に見せたい。

芝A ダート G

短距離 G マイルA 中距離A 長距離A

逃げ B 先行 A 差し E 追込 A

成長率 スタミナ20% パワー10%

王道は輝きに満ちて | Stellar |

余力が尽きた時は最終直線で加速を、余力がある時は最終直線で速度が、王の力リスマで最大限の力で上がる。

第1R

妹の病気が少し深刻化したらしい。

親からそう聞かれた。だから、引越すと。

「ねえ、パパ、ママ。…あの子は、ルクスは大丈夫かな…」

私がそう言えば、父は、きっと大丈夫と頭を撫でた。

妹、ルクスグラータスは生まれた時から病弱で、家にはあまり帰って来れず、人生のほとんどを病院で過ごしていた。

父も母も、ルクスにつきつきりで、寂しかったが、しやうがなかつた。

我が家はルクスでまわっている。当然のことだから。

私は、灰色の世界にいる。

幼い私は、悲しいと寂しいは分かれど、楽しいというものがイマイチわからなかつた。

—引越したその日。両親は律儀にも隣の家に挨拶をしていた。

隣の家の人も、鬱陶しがられず、快く応対していた。

「かあさーん、ただいまー！」

「あらおかえり、ハヤヒデ、ブライアン。ああ、ちょうど良かった。この二人は娘でー…」
芦毛と黒鹿毛の、ウマ娘の姉妹だ。

ルクスも、体が丈夫だったら、一緒にいられただろうか。

「ビワハヤヒデです。…ブライアン」

「……………」

黒鹿毛の子は恥ずかしそうにもじもじと後ろに隠れた。

「すみません、この子人見知りで…」

「いえいえ。…レックス、できるよな？」

「わかってるわよ、パパ。私の名前はステルラレックスです」

「ステルラレックス…うん、よろしく」

ビワハヤヒデは手をすつ、と差し出し、それを返した。

「……………」

じつ、とビワハヤヒデの背からこちらを覗かせている。

「…えつと」

「ああ、妹のナリタブライアンだよ。…いつもはねーちゃん、ねーちゃんって甘えてくる

けど…」

「ねーちゃん、うるさい…」

小声でボソツ、と聞こえた。

だがそれ以降、目が合わなくなった。

「よかったわね、レックス。ウマ娘の友達ができて」

「うん」

「では私たちはこれで。これからよろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ。ほら、レックス。いくぞ」

「はーい。じゃーねー!」

とくになんてことはないのだ。

世界は相変わらず、灰色のままなのだから。

その日の夜。

環境が変わったせいか、寝付けなかった。

部屋は殺風景、という訳では無いが、年頃の娘にしては物が少なかつたし、私はこれといって趣味がなかった。

「困ったな…学校あるのに」

友達はいたが、あくまで一年も満たないし、特に思い入れもなかった。

はあ、とため息をついてガラガラと窓を開ける。

隣の家の窓も閉まって、真向かいの部屋は暗い。寝ているか物置部屋なんだろう。
ガラッ!!!

「!？」

突然向かいのカーテンが開けられたかと思ったら、窓が豪快に開けられた。

「あ……」

「ビツ、クリした……えと、ナリタブライアンだっけ？」

「……ん」

ペタ、とウマ耳は前に倒れた。

ぬいぐるみは随分と力強く抱きしめられて、少し可哀想だった。

「……窓開ける音、ビツクリしたから」

「なんか、ごめん……」

何気なく窓開けただけなのに、そんな鬼気迫るような顔で開けられるのは申し訳なく感じた。

元々、ナリタブライアンは喋らないのか、沈黙が続いた。

「ねえ、ナリタブライアン。明日、一緒に学校行ってもいい？」

「……ブライアンでいい。……行ってもいいよ、ねーちゃんも一緒だけど」

「ありがとう。じゃあ、学校でね！」

「……」

コクン、と頷く姿はとても可愛いと感じたものだ。
その日を境になのか、少しだけ距離が縮まったと思う。

——そんな、夢を見た。

「……」

今日から、今住んでいる家から離れる。私一人だけ。

日本ウマ娘トレーニングセンター学園。通称・トレセン学園に、通う。

今日はまだ休日だが、寮に世話になるのは今日からになるので、家はもう出ていくのだ。

「懐かしい夢……」

自分がまだ、レースに出たい、走るのが好きになる前である。

親はルクスにつきつきりで、寂しさも、親の期待も、自分が何をしたいのかも何も分からなかった、本当に自分も世界も灰色で、何も見えなかったあの頃。

今はそんなことないが。

ガチャ

「おい、まだなのか」

「……………遠慮ってのがないの？」

「今更だろ」

「一回、ハヤちゃんに怒られるー、チクってあげるから」

「チツ…面倒になるからやめろ」

「とりあえず、さっさと着替えるから、待ってなさいよ」

「ん」

ボタン、と閉めて行った。

「ハア…よし」

パン、と頬を叩く。

ようやく本格化も迎えたのだ。やっと、二人と走れる。

ああ、楽しみだ。

世界はこんなにも、色鮮やかなのだから。

第2R

トレセン学園の寮に向かう途中。

久しぶりに会うブーちゃんを見ていた。

「…なんだ」

「私もなんだかんだと言って背が大きくなったなって。ブーちゃん、今身長何センチなの？」

「人がいるところでそれはやめろ…160だ」

「…あら、私の方が高いわ」

「…：…チツ」

にやりと言ってやると、ブーちゃんは拗ねたようにそっぽを向けた。

昔は一番背が低くて、身体計測の度にドヤ顔をされるものだから、10年分の仕返しはできたようだ。

厚底のサンダルを履いているから、余計に小さく見えた。

「もうすぐでつく」

「ああ、あの建物ね。…デツカ」

真向かいにはトレセン学園がある。
ただどあれはどう見ても、広い。

「…道、覚えられるかしら」

「その辺のヤツに聞けばいい。アンタの得意分野だろ」

「それもそうなのだけれどね。そんな何回も聞かれたら鬱陶しがられるでしょ」
手に持つパンフレットと交互に眺める。

想像の倍は広いだろう。

「でもブーちゃん、案内ありがとう。折角の休みなのに」

「…別に」

ブーちゃんはまたそっぽを向く。

耳がピクピクと動いているし、唾えている葉っぱが少し忙しく動いているので、照れているのだろうと予想がついた。

ポン

「!？」

目の前でブーちゃんの唾えていた葉っぱが花になった。

「……………おい、フジ…何やっているんだ」

ぺっ、と花を吐き捨てた後、ジロリと後ろにいるウマ娘を睨んだ。

「ごめんごめん、キミが随分と早い時間に帰ってきたから珍しくてね」
「チツ」

ブーちゃんは完全にへそを曲げてしまい、早く帰れたような雰囲気を出していた。こうなると、肉を渡すか並走の誘いをしないとダメだ。

「あ、キミが新しく来たポニーちゃんだね？ 私はフジキセキ。栗東寮の寮長をやっているよ。よろしくね」

「寮長さんなんですね。ステルラレックスです、よろしくお願いします」

「ブライアンも案内ありがとう、お疲れ様。…そうだね、折角だし今から部屋の案内しようか」

栗東寮に入っていくことにした。

ブーちゃんは相変わらず拗ねたままだった。

その後、部屋を案内してもらい、荷解きをしたら一日が終わった。

「……」が、生徒会室」

生徒会。皇帝のシンボリドルフ、女帝のエアグルーヴ、シンボリドルフと同じく

三冠をとったブーちゃん。

意外にもブーちゃんは副会長をやっているようだが、ちゃんとやれているだろうか。フジキセキ先輩から聞くに、寮の門限を破るし、生徒会の仕事をよくサボるしでどうも問題児そうだった。

コンコン

「どうぞで」

「失礼します」

シンボリドルフは、何度もテレビで見たことがある。

そういえば、ルクスもキラキラとした目で見ていたものだ。

ルクスは、レースに憧れていたから。

「はじめまして、ステルラレックス。この学園の生徒会長を務めている、シンボリドルフだ。よろしく頼む」

「あ、よろしくお願ひします」

何度もテレビで見たことがある、そう考えたら今更だけど緊張してきた。それを見て、シンボリドルフは人の良さそうな笑顔で、緊張しなくていい、と言われた。

「すみません、妹と共にテレビで何回も見たことがあったものですから…」

「妹といったら…ああ、病弱の」

ピラリ、とシンボリルドルフ…会長は手元の資料を捲る。

その資料、というより自分の個人情報を書かれていた。

「…ええ、生まれた時から病弱で。府中のお医者様には大変良くして頂いているお陰で、最近はず調子がよくなっているみたいです」

「そうか…良くなるといいのだが」

「はい。…それでお話というのは？」

「ああ、君に質問があつてね。この学園に入つて、何を成したいのか。それを君の口から聞きたい。」

「…何を成したい、か。ハヤチャ…ピワハヤヒデとナリタブライアンだけじゃなくて、強い人たちと戦うこと。それに…病弱で走れない妹の為に姉らしい、カッコいい姿を見せたい。あと、私…ミスターシービーさんに憧れてて…彼女のような魅せる走りをした、といったところですよ」

ミスターシービー。

三人目の三冠ウマ娘と呼ばれている。

彼女の走りは、今でも覚えている。手に汗握る、掟をも関係ないと言わんばかりの追い込み。

自由の象徴であり、憧れた。自分の持つていないものを持つているのだから。

「ミスターシービー、か。ふむ…そうか。そういうえば、確か君はここまで負け知らずのようだったね」

「本格化がきてからの話ですけどね」

「…ふふ、楽しみだ。星の王と皇帝、どちらが雌雄を決するのか。それまで、待っているよ。ステラレックス」

ビリビリと圧を感じた。

この圧の中、実際に一緒に走れば、どれほどのプレッシャーに晒されるんだろうか。

目の前の皇帝は、表情は変わらずとも、目はギラついている。

その目で見られると。

「…ええ、楽しみに待っていてくれると。嬉しいわ」

怯むのではなく、笑みが零れてしまうのは、こちらもブーちゃんに影響されているからか。

それとも、ハヤちゃんみたいに絶対に勝つという不屈の心があるからか。

どちらもなのか。

ああ、早く走りたい。

早く走って、怪物だろうがなんだろうが。

ひれ伏せさせたくなる。

そう考えてしまうのは、自分が暴君だからなのか。
それは皇帝も、私も分らないものだった。

第3R

話が終わり、長い廊下を歩いていった。

「……………」

緊張した、の一言。

というか、皇帝相手に何をメンチきったのだろうか。

「…目、付けられたわよね」

死んだ目でターフを見る。

外には既に練習しているウマ娘とトレーナーがいた。

今のんびりしている場合ではない、が。

肝心のトレーナーがいない。

なんでも、チームに入らなければならぬらしく。

「ふ〜む…」

今こうしてチームのポスターを眺めてはいるものの、多すぎて分らない。

眺めていれば声がかけられるはずだが、声をかけられない。遠巻きで見られているだけだ。やはりこの見た目は、ここでも目立つみたいだ。

「ねえ、貴女」

栗毛のウマ娘にやっと声をかけられた。数人のウマ娘を連れて。

「芦毛じゃなくて白毛で合ってるわよね？」

「…ええ、そうだけど」

「ふうん…：そういえば貴女、編入生で三冠ウマ娘のナリタブライアン様と一緒にいたわね。白毛のノロマのクセに、生意気ね」

「……はあ」

随分と面倒なヤツに絡まれたものだ。

しかも一緒に走ってもいなくせに、ノロマと決めつけてきた。

確かにトウインクルシリーズでも白毛のウマ娘は圧倒的に少ない。白毛自体が少ない故に。

しかもブーちゃんと一緒にいるだけで難癖をつけてきた。

確かにブーちゃんは三冠ウマ娘ですごい子だ。だがその前に大事な親友である。

「あなたみたいなのが、チームに入るところか、デビューなんて無理よ無理。しかも三冠ウマ娘と一緒にいるのも不釣り合いだし」

面倒だなど思っていたらどんどん勝手に話が進む。

というかチラチラと此方を見る人がいるし、コソコソと話をしている。

見ているぐらいなら止めて欲しいものだが。

「…ちよつと話聞いてるの?」

「ああ、なんの話でしたっけ」

「編入生のクセに、生意気ね!!」

「どうかここで問題起こさない方がいいのでは?というかチーム決めたいんですよ。用がないならさっさと帰ってくれます?」

「っ、このっ…!!」

しつこい。しかし、このウマ娘。随分と短気だ。

というか、取り巻きらしき人が滅茶苦茶睨んでくる。

「あーもうめんどくさい。そんなに鬱憤溜まつてるならその取り巻き全部まとめて野良レースにしない?全員、纏めて潰すから」

ブチッ!!!

「ええ、ええ!!上等よ!!」

こうして、野良レースをすることになってしまった。

「…む？なんの騒ぎだ？」

「あー、ハヤヒデー！今から野良レースするんだってー!!」

「野良レース…？…あれ、レックスじゃん」

ザワザワと随分と騒がれている。

栗毛のウマ娘は、G1で勝っている強いウマ娘らしい。

確かにそこにはテルがいて、アップをしている。途中で目が合って、笑ってピースをした。それに私も手を小さく振って返した。

「…うっわ、目えいつてる」

タイシンは若干引き気味である。

どれだけ煽ればここまですぐのさだろう。というより、レースに集中出来るのさだろうか。

「でもあの子、大丈夫かなー…？」

チケツトは少し不安げに言う。

それもそのはず、編入したばかりのデビューをしていないウマ娘だからだ。普通ならそう思うだろう。

「いや、テルなら大丈夫だ」

「え？」

「私の推測が正しければ…走っている者全員、心が折れる」

「…そうなの？」

「ああ。なぜならテルは…」

バン、とゲートが開いた。

腹の立つウマ娘だ。だけど、相手がデビューしていなかろうが、手は抜かない。

あの子は、追込でいくようだ。

ただ、ずっと、ずっと、何かが這うような、胸が重くて苦しいような。

何か嫌な感覚が私を駆け巡る。

いくら気が立っていても、ここまで集中できないなんてことは無かったはずだ。

まだ。

まだ。

まだ。

今、ここ。

大丈夫、大丈夫。今理想的なレース運びができてる。

シイイイイツ…

謎の音が聞こえた。音が聞こえた方向へ、目だけ向かせる。

「ヒッ!？」

ピツタリと、後ろに白毛のあの子がいる。

そして、謎の嫌な感覚が、強くなる。

怖い。

怖い。

怖い。

恐怖で足が進まなくなる。

せつかくスパートをかけたのに、これでは意味が無い。

「…お先に」

今までのあの子はどこに。

あの前のウマ娘は誰。

あの冷たい目でこちらを一瞥した、目の前の、ウマ娘は…

恐らく最低なタイムで、私はゴールした。

実は白毛だから遅いとからかわれたのは今に始まったことではない。

だからこうして、走って、思い知らせる。思い知らせて、こうして、地を這わせる。

散々つかかかってきたウマ娘たちは、後ろでへなへなになっている。酷ければ、呼吸困難になっているはずだ。

「……ヒュー、ヒュー……」

この人はもう、走れないだろう。

プライドがあればあるほど、私の走りというものは心を折らせるものだ。強い人はここでは終わらないはずだが。

いつの間にかできた観客にはどよめきが広がっている。

編入してきた私が、G1のウマ娘に大差勝ちした。

「…誰かこの子達を保健室に」

そういうと慌てて人が何人か降りてきて、保健室に運ばれた。

「…テル」

「ハヤちゃん」

ハヤちゃんが静かにこちらに来た。

昨日は運が悪かったからか、会えなかったのだ。

「前よりも速くなったな」

「ありがとう」

「…それにしても、なぜこんなことに？」

「それは…」

経緯を話すと、ハヤちゃんはまたか、と苦笑する。

「大丈夫だ。私は君の強さを知っている。それはもちろん、ブライアンもな。君のその脅威的な圧とその呼吸、そして鋭い末脚には負けていられないな」

「…ハヤちゃん」

「編入して早々は災難だったな。ゆっくり休むといい」

「うん」

大人しく、ハヤちゃんの手を受け入れるのだった。

第4R

あの野良レース以来、みんなから避けられてしまった。

見た目に反して悪魔のような、怪物と言われても仕方ない走りだと。

「困ったわねえ……」

絡んできたウマ娘を下したことで、様々なトレーナーからチームに入らないかと誘いが来るようになった。

因みに、絡んできたウマ娘はあれ以来見ていない。

「私は怖くないのにね」

どちらかというところ可愛いお顔に産んでもらったはずなのだが。

プニ、と頬を持ち上げる。

「お前がステルラレックスか？」

「!!」?

誰もいないから良かれと思って頬をムニムニしたのが見られた。

「……間が、悪かったか？」

「……忘れろ、いいな？」

「お、おう……」

目の前の黄色のシャツに黒ベストの、男のトレーナーだった。

「なあ」

「何よ」

「触っていいか？」

「随分と積極的なセクハラ発言じゃない、ぶっ飛ばすわよ」

なんだこいつ。

こころは変なやつしかいないのか。

「だよな。まあ触らなくてもかなり完成されてるが」

「たづなさんに投げ渡すわよ」

もういつそ、ブーちゃんのいるリギルとやらにしようか。

多数のウマ娘を見てきているから、そこら辺はしっかりしているだろう。

もうこの際、隙を見て逃げよう。

「クラシック三冠、お前なら夢じゃないぜ」

「……あら、それはどうして？」

「走法に関しちやまだ少し改善点があるが…、何よりも特筆すべきは、心を折らせかねない庄と…お前、何かやってるな？」

「何、ね…。多分客席からじゃ人間の聴力じゃ聞こえないはずだけど」

「あの日、対戦したウマ娘がブツブツと言っていたんだよ…。お前の口から大きな呼吸の音が聞こえたってな」

「ああ…。呼吸ね。これでしょ？」

シイイイイ…

独特な、空気の音が聞こえた。

これは、二人よりも体の発達と本格化が遅れていた私が、少しでも二人に追いつくように、と苦心しながら会得した呼吸。

例えば、漫画。

友達から少し借りた漫画では、呼吸によって身体能力を強化していた。

そしてルクスの本を買いに歩いていたら時に見つけた、呼吸による身体能力の改善と健康について書かれた本。

なので、ランニングがてら酸素の薄い山に全力で走り込み、整備されていない獣道よりも酷い、道ですらない——を全力で走り込み、腹に力を入れて。

ひたすら走って、走って、走って繰り返して。

こうして身につけた先が、スタミナゴリラおぼけになったのだ。

「…肺活量か」

「ええ。勿論、スピードとパワーだって、山の獣道すら酷いところで走ったもの。負けな
いわ」

走法は少し大雑把かもしれない。

今までやってきたものは全部、基礎トレーニングだ。

二人では何もかも、劣っていたのだから。

がむしやらに、泥まみれになろうが、培ったものだ。

「…お前は、なんのために走る？」

「怪物だろうが、皇帝だろうがなんだろうが。私は強い人と戦いたい。ミスターシー
ビーのような、魅せる走りをして、妹が誇れるようなカッコイイ姉を目指すわよ」

「そうか。なら、俺のチームには？」

「入るわ、ええ。私の技を見抜いたんだもの！ 気に入ったわ、よろしく。トレーナー！」

トレーナーと私はニヤリと笑って、互いの手をパン、とぶつけ合った。

「イツテエ!？」

「あらごめんなさいね」

こうして、チーム・スピカの一員になったのだった。

メイクデビューまでの道のりが近くなった。

第5R

「つつーことで、新しくチームに入った、ステルラレックスだ」

「よろしく」

「あー！ちよつと前にカイチョーに喧嘩売った子だあ！」

シンボリルドルフに似た…トウカイテイオーにあらぬ誤解を受けていたらしい。

「ええ!？」

「おいおい、マジかよ…」

「…お前、喧嘩っ早いよな」

「ちよつ、違うわよ？誤解よ!？」

「貴女があ…」

反応は様々だが、好感触のようだ。

「ちよつと、一戦構えたいですわって言っただけよ？」

「それは喧嘩売ったと同じでは…」

「前の野良レース、見ました！凄かったです！」

「あーあー、お前ら！いっぺんに話しかけるな!!一人ずつ紹介しろ！」

やっと一人ずつ紹介してくれた。

どれもみんな、すごい活躍をしたウマ娘たちだ。

「…あ、あなたって」

「ん？」

「有馬記念でハヤちゃん和戦った…トウカイテイオー？」

有馬記念は実は1回、見に行ったことがある。

足を何度も故障したことも、テレビや新聞で見たことがある。

有馬記念はもしかしたらラストランになるかもしれないと。

だが、ハヤちゃんと接戦し、最終的に勝った。

友達としてハヤちゃんを応援していた自分も、涙を流していた。

「ハヤちゃんってハヤヒデのこと？うん、ボクがトウカイテイオーだね」

「つつつ！あの、あの…有馬記念…凄かったです」

「えへへ、ありがとう」

「あの有馬記念、見に行っていたのか？」

「ええ。それに、私が本格化始まったの、その後すぐだったの」

「そうなんですの？」

「私、体の成長も本格化も遅かったから」

本格化が来なければ、断念せざるを得なかった。
絶望した先が、有馬記念。

見ていたら走りたくなかった。走ったら、前よりもグンと速くなった。
笑った。

涙を流しながら、笑っていた。

「どうだバカども!!!私は!!!走れるぞ!!!」

あの時は記憶が定かではないが、この一言は覚えていた。

「ステルラレックスさん？」

「レックスでいいわ。いや、ちよつと昔を思い出して」

「:さて、レックス。メイクデビューのことなんだが」

「ん、なにかしら」

「明後日にしようと思う」

「は？」

「明後日だ」

「はあああああああああああ
???????!!!!!!」

「はあああああああああああ
???????!!!!!!」

メイクデビューの日が思ったより近かった。

「ちよつと！調整!!まだ何もしてないわよ!!!」

「今の実力なら楽勝だろ」

「ウイニングライブ！Make debut！振り付けとかわからないわよつ!!」

「あつ」

「あつ!!あつじゃないわよ!!!」

「……すごい、スピカに常識人が」

スピカはウイニングライブをやらかしている。

それは新聞にも出ているほどで、スペシャルウィークから始まり、ダイワスカーレット、ウオツカ、ゴールドシップがやらかしている。

「まーまー。大丈夫だろー。私たちの二の舞になるだけだしよー」

「なんで今ここで高速で一人チェスしてるのか聞かないでおくわ」

大丈夫なのだろうか、このチームで。

「まーまー、ボクができる限り教えるからー」

「地獄を見ようぜ」

「全力で覚えるわよ！チクシヨウツ!!!」

大事なテスト一日前はこんな感じなんだろうか。

私は血の涙を流す勢いでウイニンググライブの練習に挑む事にした。
クラシック三冠挑む前の、難関では、なかるうかと。

私は思った。

第6R

トレーニングは順調に進んだ。

メイクデビューで出るレースはマイルの芝。

スピードとパワーを主に上げた。スピカのメンバーは快く、トレーニングに付き合ってくれた。

しかし問題がひとつある。

ウイニングライブ。

結局ダンスは間に合わなかったのだ。

ズーン…

「だ、大丈夫だよ。筋良かったし」

「もうどうにでも……ん？」

ひとつ思い出した。

ミスターシービーはあの時どうしただろうか。

「もう自由に踊るわ」

「ええ……」

そんな悟りに至れば、あとはもう簡単だった。

パドック。

私は、1番人気を貰っていた。

「1番人気、三番、ステルラレックス！」

その声に導かれるように入っていくと、どよめきが走る。

「えっ、白い……」

「芦毛じゃなくて……白毛……？」

「あの子速いの……？1番人気だけ……」

観客にどよめきが走る。

白毛の認識は思ったよりも冷たいのだ。

「レックスさーん！頑張ってくださいーい!!!」

どよめきの中に、スベ先輩の声が聞こえた。

次々とスピカのメンバーの声も上がる。その様子に、思わず笑みがこぼれる。

「……」

すう、と息を吸う。

「私の名はステルラレックス！このレースに勝って、クラシック三冠を掴み取る者だ!!」
ザワザワとどよめきが走る。

「私の走りを見て信じていい！私は走れると!!」

そして後ろに翻す。

「す、すげえ…気の強い子だな…」

「でもなんかあの子強そう」

「期待してみてるか…」

観客に期待が走る。

ゲートに入る。共に走るウマ娘達は、困惑した目でこちらを見る。

「全員、ゲートに入りました。」

ガコン

ゲートが開かれた。

「一斉に綺麗なスタートをきりました」

「誰が最初に抜け出すか注目しましょう」

実況の声が耳に届く。

今回は先行の少し後ろ。差しまではいかないが、先行の集団より少しだけ後ろの位置に付けた。

レースは特に何も無く進んでいく。だがそれでも私の威圧に負けて後ろに、ジリジリと下がっていく。

「なんと、ステルラレックス以外、逃げ、先行で進んでいた全員がかかっている！」

「これはどういうことでしょうか」

「ステルラレックス、悠々自適に進んでいく」

第4コーナーカーブ。

差し、追込のウマ娘達が追い上げていく。

逃げ、先行のウマ娘はあつという間にバ群に沈んだ。その光景もまた、異様であり、沈むとしても全員はいないはずだったのだ。

だが、そのスパートをかけたウマ娘たちは、かかってしまった。

これには、会場の誰もが、驚きを隠せない。

そして、それを最前席で見た人は眩いた。

「あれは怪物だ……」

「そりゃあ後ろの子達耐えられないだろ……」

「ふっ!!」

そして最後のダメ出しと言わんばかりに、レックスはスパートをかける。それはもう大差。

差をさらにグングンと広げていく。

後ろのウマ娘達は、諦めてしまっていた。

それもそのはず、喧嘩を吹っ掛けた、レースに出ていたウマ娘でさえも、心が折れるレベルなのだ。

レースの経験のない子たちは、怖くて怖くて、泣き出してしまいたかった。

これはもう蹂躪。

星の王は、初陣を蹂躪しておわったのだ。

あのレースのあと、走りきったウマ娘たちは立てなくなっていたし、トレーナーに泣きつく子もいた。

全員立てない中、私一人だけ、立っていた。

観客は、呆然としていた。あっさりとその概念を打ち破った私に。

それは、暴君にひれ伏す平民の図。

そんな中、私は、チームのみんなにピースをしていた。

ウイニングライブ。

あの後、ウマ娘達はダウンした。圧に負け、暫く立てなかったため、実質私のソロライブだった。

「……………」

曲は完全に自由になった。

いきなりと言われても、思いつくものでは無いのだ。

なので、得意な軽業を披露した。それらしい音楽に乗せて。

パチパチと拍手がなる。

玉乗りして、ジャンプして。

(……これ怒られるわよね)

勘弁してくれ、歌を練習してなかったのだから。

せめて皐月賞までには *w i n n i n g t h e s o u l* 完璧にしてくるから。許して。

あ、朝日杯フューチュリティステークスが先だから、先に *E N D L E S S D R E A M* が先ね。

なんとか軽業を終えることが出来た。

後日、新聞にてウイニングライブで軽業を披露する、チームスピカのメンバーとして

大々的に取り上げられることになった。

第7R

後日案の定怒られた。

というよりも、エアグルーヴに怒られている。

会長も出る幕がないようだ。ブーちゃんは呆れた顔でこちらを見ている。

「…で、聞いているのか」

「すみませんでした…」

こういう時は黙って聞くに限る。というよりも八割…いや二割は自分も悪いのだけ
れど。

啖呵を切つといてウイニングライブは軽業である。

拍子抜けもいとこだ。だがこれしか出来ないのだ、しょうがない。

「ごめん、カイチョー。さすがのボクたちでも間に合わなかったよ…」

「あのトレーナー…蹴っ飛ばす…」

正座で足が痺れて前のめりに倒れる。

新聞には大々的に私の記事ばかり。ひれ伏す走者と私、更に大きい写真でウイニング
ライブを軽業で披露。なにこれ。

ふみ

「ヴ……ッ!!!」

足痺れたところをブーちゃんに踏まれた。鬼畜生である。

野太い声はご愛嬌に。

「でもアンタの軽業、久しぶりに見たな」

「いつぶりだったかしらね……?」

呻き声しか出ない。

足の感覚が戻るまで、何時になるのやら。

「……確かブライアンとレックスは幼馴染だったかな?」

「ああ。家が隣同士でな」

つつん、と私の頭をつつつく。人の頭で遊んで楽しいのだろうか。

「思い出した……確か雨の日でかけっこ出来なくて、ブーちゃんたちの家のバランスボールの上で歩いたんだった」

「ええ、そんなことしてたの……?」

「ええ。その後逆立ちにも挑戦していつの間にか……」

「人の家の物で何をやっているんだ……」

「結構大ウケだったわよ。怒られたけど」

あの時はみんな、やんちゃだったもので。

最初は止めていたハヤちゃん、楽々とバランスボールの上を歩く私に興奮して。走れなくて拗ねていたブーちゃんは、自分もやると言い出して。

「あの驚異の体幹の良さはそこから来ていたのか…」

そこからどこから用意したのかビニールテープで綱渡りの代わりをして。

いつの間にか、軽業師・ステルラレックスの誕生に繋がってしまったのである。もちろん、危ないのでマネはしないように。

「まあでも流石に次のウイニングライブの練習はしてるから…その…すみません…」

「そういえば、次のレースはどこに出るのー?」

「朝日杯フューチャリティステークスね。その後にホープフルステークスにでるわよ」

「え、随分とスケジュールがハードじゃない?」

「私も思ったけど…走法の改善を少しやればいけるってトレーナーが」

「ええ…」

トレーナーのトレーニングプラス、自主トレ。

トレーニングは走法の改善、自主トレは呼吸を常にできるようにすること。

これは前から行っていたことであり、両方とも大分タイムが改善された。

この分なら行けるとのこと。

「まあでも、次の並走でスケジュールは変えるかもしれないわね。ダメだったらホープフルは止めて、朝日杯の前にサウジアラビアロイヤルカップにするし…ブーちゃん?」
「無理はするなよ」

「私をいったい幾つの子供だと…まあでも、今までの例があるものね。分かったわよ」
「ブライアンってレックスの事になると過保護になるよね…というかブーちゃんって呼ばれて…ぶっ?!」

「いたっ?!」

ブーちゃんと呼ばれていたことにかかったテイオーは口を引っぱたかれ、私も叩かれた。

「可愛いじゃないか、ブーちゃん…」

笑いこらえているエアグルーヴに…いや、最早堪えきれていない。

「……お前のせいだぞ、テル……!」

「まあまあ、ブライアン。喧嘩はするものじゃないよ…お」

ピン、と会長の耳がたった。なんだろうか。

「喧嘩…喧嘩。うん。ケンカはしちゃいけないか。ふふ」

「……さすがです、会長………」

生徒会室の空気が冷えきった。

エアグルーヴのフォローが、痛かった。

第8R

私の部屋は殺風景だった。

物はあまり持たないようにしていたし、物を捨てるのが好きな故に、何も無かった。

「アンタの部屋、本当に何も無いな」

「なんといかまあ……高校生にしては物が無さすぎるな」

「……そう？」一応美容品はあるのだけれど」

ブラシ、テールオイル、ヘアオイル……あくまで身だしなみに必要なものである。

ハヤちゃん程ではないけど、髪もまあフワフワしているので付けている。

必要なものがあればそれでいいのだ。

服も3、4着あれば充分なもの。ダメになれば新しいのを買いに行けばいい話だ。

「まあ確かにそうだな」

「……………まったく」

ハヤちゃんは深いため息をついた。

「ブライアン、お前あれから服買っているのか？」

「……は？」

「まさかとは思うが…私のお下がりと前買った服だけとは言わないよな？」
面倒なことになった。

一度こうして火のついたハヤちゃんも誰にも止められない。

「服、買いに行くぞ。今週末にな」

「…今ので十分なんだけど」

「服がだいぶヨレヨレなんだが？」

「……………」

「…チツ、めんどうな…」

これは着せ替え人形になるしかない。

二人は決意する他なかった。

シヨッピングモール。人が多い。

結局引きずられる形でシヨッピングモールに入ることになった。

「……………おい、なんで手を繋ぐ必要があるんだ」

「お前たちは勝手にどこかに行くからな」

「すごい目立つ……いい歳した高校生が……」

最強姉妹と有名な二人は目立つ。それプラス、前のウイニングライブで軽業をした私である。絶対に悪い意味で目立つ。

「……くそっ」

ブーちゃんはもう機嫌が斜めである。私も異議申し立てしたい。

「……はあ……」

「よし、早速いくぞ」

だがここからは地獄だということを、私たちは知らなかった。

「着ろ」

「着ない」

「着ろ」

「着ない……!!」

ハヤちゃんは完全に別の方向で火がついた。

今、私が入っている服はフリフリだ。昔着ていたので最早何も思わないけどやはり、年齢的なものできつい。

しかも未だに親からもフリフリの服が送られる。

サイズも全然合わないので、申し訳ないが捨てている。そういえば最後に会ったのい

つだらうか。

「…しようがない、入るぞブライアン」

「!?おい、テル!!この頭でつかちを止める!!!」

「……諦めなさい」

「私の頭はでかくない。全く、お前は昔から…」

「待て…おい、やめろ!~~~~っ!!!」

試着室に入る2人を見届けた。

これもまあ目立つ目立つ。有名人は辛い。

ドタバタドタバタと試着室が揺れている。狭いのに暴れるからだ。

「ちよつとブーちゃん。試着室で暴れないのー」

「テルのバカ野郎!!!」

「こらブライアン!!服が破けるだろ!!!」

「バカ姉貴!どこ触ってるんだ!!」

その無意味な攻防はどこまでも続いた。

シヤ、とカーテンを開かれた。

「……………」

完全に怒っている。耳が後ろに伏せられている。

服は私の色違いと言ったところか。

私が赤に対して、ブーちゃんはピンク。かつ髪型もポニーテールからツインテールに
されている。

ハヤちゃんはもう着替えていた。色は黄色。

「ふむ、さすが私の妹だ。よく似合っている」

「ヒラヒラしやがって……!」

「ライブ衣装も着てんだからこれぐらい平気でしょ?」

「それとこれとは訳が違う……!」

しかしこれは双子コーデならぬ3つ子コーデだ。

なんかそれはそれで恥ずかしくも可愛い。

しかしここで、暗雲が立ちこめる。

「あれー? ブライアンさんだー!」

オレンジ髪の小さい子…マヤノトップガンがブーちゃんの名前を呼ぶ。

「マヤノ……!」

サツ、と青ざめた。

「…ハヤヒデ、レックス、あんたらどうしたの…」

「……タイシンン?!」

「ああ、これは…ハヤちゃんが変なスイッチ入っちゃって」
「ああ…」

我に返ったハヤちゃんはピシツ、と固まる。

タイシンは察したのか、哀れみの目でこちらを見る。

どうもここは知り合いの子も来るようで。

「おや、偶然だね」

「……………なんだこれは」

会長と副会長が集結した。何これ。

ブーちゃんにとってはさらなる地獄だろう。

「ブライアンさんどうしたのその格好？かわいいー!!」

「ちが、これは姉貴が…!」

「タ、タイシン…何故ここに…!」

「ゲーセンで新しい音ゲーのやつ出たから遊んでたんだけど。…ごめん、大分目立ってたから」

「君もそんな格好するんだな」

「ハヤちゃんが変なテンションになってたので。ああ、でも小さい頃は似たようなの着てましたよ」

「あまりはしやぎすぎるなよ。こうして他の生徒も遊びに来ているからな」

「肝に銘じますわ。…あーあ、これは地獄絵図ね」

ふっ、と横を見ると、気を使って去ろうとするタイシンをハヤちゃんは必死に止め、マヤノトツプガンの口を必死に抑えるブーちゃん。

事態を収拾するのに、副会長が止めにかかったのだった。

第9 R

芝1600m、朝日杯と同じ距離。

併走する相手は、スカーレットとウオツカ、スズカだ。

「レックス先輩、よろしくお願いしますー！」

「こちらこそよろしくね」

「併走でも、負けないわ」

「ええ」

「よーしお前らー！準備はいいかー！」

トレーナーの声が遠くから聞こえる。

「いつでもいいぜー!!」

かわりにウオツカが声を上げる。

昨日の惨劇？ 忘れたわそんなもの。しばらくブーちゃんは肉を食べても機嫌が悪かったのだけ言っておく。

しかしこうも、強い相手と併走なんてワクワクしてしまう。

はやる気持ちを抑えて、スタートした。

速い。

速い。

速い。

大逃げの戦法のスズカ、先行のスカールレット、差しのウオツカ。

私は追込。

三人は特に圧を感じさせない走りだ。前回のメイクデビューとは違い、誰も掛からな
い。

なるほど、これがG1の数々を勝ってきたウマ娘たちの力なのか。

ああ、面白い。

私は、ニヤついてしまう。

雰囲気が変わった、気がする。

オレは、後ろのレックス先輩の圧を感じつつも、走っていた。

この緊張感は、オレが今までに出たレースと同じくらいか、それ以上の緊張感だ。

オレには越したい人が沢山いる。

併走だろうが、なんだろうが、オレは負けねえ。

オレはただ、勝ちを狙うだけだ。

それでも。オレはこのゾクゾクした感じを、楽しんでる。

レックス先輩は間違いなく、ブライアン先輩と並びうる、カッキー人になる。

もちろん、今もカッキー。だがもつと、カッコよくなる。

オレは想った。それでも負けねえ。

よし、ここから仕掛ける。

スカーレット、先輩方。勝負だツ!!!

レックス先輩は、白かった。

ゴルシよりも、白い、綺麗なウマ娘。

でもそれだけじゃない。レックス先輩は、きつとすごいウマ娘になる。

そんな気がする。

でも私だって負けない。

スズカ先輩だろうが、ウオツカだろうが。

もちろん、後ろの圧はすごい。

ゾワゾワする圧。前の私なら、怖くて、かかってたかもしれない。

それにこの圧はウオツカが一番かかっているけど、ものともしていない。

それなら私は負けないし、負けたくないし、屈しない。

今の私なら。

一番を譲らない。

ウオツカにも、スズカ先輩にも、レックス先輩にも。

さあ、いくわよ。

私が、一番を取るんだから!!

前へ、前へ、前へ。

私は、走っているときは全く、何も感じない。

ただ、先頭の景色を見たくて。夢中に走る。

でも、普段は感じないはずの、圧、とかそういうものが感じる。

…もつと、速く走らなきゃ。

でも、まだダメ。

先頭の景色を譲らせないようにするにはまだ。

ああ、でも。

もつと走りたい。

もつと、もつと。

こんなにワクワクしてしまつて、どうしよう。

レックスちゃん。

あの子はきつと、ぐんぐんと伸びる。

だけど、関係ない。

私の先頭の景色は、誰にも譲らないから…！

「っ！！」

スズカが、スパートをかけた。タイミングはちょうどいい所だ。

こちらもスパートをかける。じゃないと追いつかない。

それはスカーレット、ウオッカも同じことで。ぐんぐんと走る速度が速くなる。

しかし、速い。面白い。

シイイイイイ……!

もつと、もつと。

足に空気を。

ぐんぐんと、追いつく。

ゴール板に近づいていく。

何とかゴールをするも、やはりと言うべきか。

経験の差がある。当たり前だ。

私は四着だった。

「あーっ、負けちまったー!!」

「危なかった……越されるかと思った……!」

「……お疲れ様、レックス」

距離が長かったらわからなかった。

それぞれみんなハナ差だ。

それでも悔しい。やはりまだ、足りないのだ。

「……ええ。私も、もつと強くならなきや」

まだ、まだ始まったばかりなのだから。

「トレーナー、どうかしら?」

「シニアまで走り抜いた三人に食らいついたんだ。走れる。これまで以上にビシバシ行くぞー！」

「…ありがとう」

朝日杯は本当はやめようかと思っていた。が、トレーナーが大丈夫なら、出ようと思う。

調整を頑張らねば。そして、そして。

誰よりも強くならなければ。